

	評価計画				自己評価				学校関係者評価	改善計画		
	中期経営目標	重点項目	達成のための方策	評価指標	目標値%	アンケート				結果と課題の説明	コメント	改善策
						職員	生徒	保護者	評価			
1	「人を人として大切に思う心」の育成	積極的な生徒指導の推進	生徒指導の3機能(自己決定の場を与える、自己存在感を与える、共感的人間関係を育成する)を意識した授業や学級経営を行う。	生徒同士がお互いの考えを認め合える授業や居場所づくりが行われていると考える割合	85	95	89	63	B	学活や学校行事等を中心に、お互いの考えを伝え合い、合意形成をしながら進める取組を大切に持って行った。生徒にとっても実感できるものであった。	<ul style="list-style-type: none"> ・自由の相互承認不足がわがままのぶつかり合いにつながると聞く。社会生活を営んでいく上で場に合ったコミュニケーションのとり方を身につけていく必要がある。 	生徒指導の3機能を生かすための視点もちながら、職員間で授業を公開しあい、意見交換をする機会を設ける。生徒指導の3機能に関する校内研修を行う。
		道徳教育の充実	生徒が自分のこととして捉えたり、自他のことを考えたりできる道徳の授業づくりを行う。	自分のこととして捉えたり、自他のことを考えたりすることができた割合	70	100	93	63	A	ローテーション道徳を取り入れるなど、学年部で道徳の授業づくりに取り組んだ。また、通信を通して様子を保護者にも伝えるよう努めた。		道徳の授業内容を自分のこととして捉えることができて、その場限りになっているのではと感じることがある。脱却するための手だてや言葉かけのあり方を考える場を設ける。
		協働的な学びの推進	生徒の話をじっくり聞く環境をつくる(教育相談の充実)。	生徒が話をじっくり聞いてもらえる環境が整っていると感じる割合	80	100	91	59	A	定期的な教育相談機関に限らず、普段からこまめに生徒とコミュニケーションをとりながら話しやすい雰囲気づくりに努めた。特に、保健室は生徒が気軽に相談できる場として大きな役割を果たした。一方で、なかなかじっくりと時間を取って一人ひとりと教育相談を行うための時間は少ない。		時間が増やせるとよい。教育相談の事前アンケートでは担任以外の職員を相談相手として選択できるようになっているが、より気軽にいろいろな職員に相談できるようにするための手だてがあってもよい。
2	協働的な学びの推進	それぞれの単元や題材に一つは、グループやペアで意見を出し合いながら取り組む課題を設定する。	ペア学習やグループワークを通して、自分の考えが深まったと感じる生徒の割合	70	71	91	61	A	生徒自身がペア学習やグループワークの効果を実感していることがうかがえる。しかし、教科の特性や学習内容によっては、ペア学習やグループワークを単元・題材の一つずつ設定することは難しいことも浮き彫りになった。	次年度は多様な学習形態を効果的に使いながらも、より実態に即した目標の設定を検討する。		
4	「わかる」授業づくり	授業の質の向上	見通しと振り返りを大切にした学習過程の実施したと答える教員の割合	見通しと振り返りを大切にした学習過程の工夫	100	95			A	研究部から示した授業改善の柱であり、教員は各々がかけた取組ができた。こうした日々の取組が定着し、生徒は授業に見通しをもって臨み、理解が進んだ。	<ul style="list-style-type: none"> ・実際にタブレット端末を活用した授業を参観し、生徒の学びが主体的・協働的に行われている様子がよく分かった。 ・振り返りは次の活動等への見通しを立てるためにも重要である。ねらいや意義、身についた力を明確にし、自己の課題に取り組めるようにしてほしい。 ・生徒同士で家庭学習の内容や仕方等について情報交換をする機会があってもよいのではないかと。工夫した学習方法やどんなことに興味をもって取り組んでいるかを知ることで、学びが広がるのではないかと。 	・研修機会をもって情報交換ができるようにする。
		生徒一人一人の家庭学習の習慣化	授業と直結した家庭学習課題の提示を行った教員の割合	家庭学習が学年目標時間程度できていると回答する生徒保護者の割合	70	50			C	家庭学習の習慣化のため、家庭学習ノート(1日1ページ)を全学年で行った。しかし、授業と直結した学習課題の提示が不十分だった。		・各教科が予習復習を含めて宿題をどんどん出すようにする。 ・家庭で指導してもらうよう働きかける。
		ICTを活用した学習活動の推進	各教科でのICTの活用(大型モニタータブレットドリルを含む)	ICT(大型モニタータブレット等)を活用した授業をしていると答える教員の割合	65	72			A	タブレット端末を用いた共同編集機能について教員研修を行い、活用が促進されてきた。授業や家庭学習でもタブレット端末を普段使いとして活用できるような機会を増やす。		ICTを使用している割合の共有や練習などの課題の提示を一層行う。来年度はもっと基準を上げて臨むべきか。
5	ICTを活用した学習活動の推進	授業でICTを活用している生徒保護者の割合		50		79	57	A				
7	「生徒の心に火をともし」教育の推進	縦割り活動を生かした活動の推進	生徒会を中心とした縦割り活動の企画と実施	縦割り活動に意欲的に参加できたと思う生徒の割合	90	95	83	56	A	生徒会活動に異学年交流の集いを定期的に位置づけ、生徒主体の取組を行った。毎回創意工夫を凝らした活動で、多くの生徒を巻き込んだ活動ができた。保護者に向けて、様子を発信する必要がある。	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリアパスポートの取組について、生徒も肯定的に受け止めているが、保護者には十分その意義が伝わっていないのではないかと。保護者にも生徒の学びの様子が伝わりやすい方策を考えていく必要がある。 	全校生徒が意欲的に参加できる異学年交流という視点で、生徒の意見を取り入れた企画・運営を行う。学年・学年通信等で、生徒集会の様子や感想等を発信する。
		体験的な学びの場の設定	総合的な学習の時間などにおける地域やふるさとに関わる体験的な学習の実施	総合的な学習の時間などにおける地域やふるさとに関わる体験的な学習の実施をとおして学びが深まったと考える割合	70	94	82	60	A	総合的な学習の時間や行事等を通して地域と連携した体験活動を行うことができた。一方で、活動を通じた学びの深まりには不十分なところがあった。ねらいを明確にし、探究のサイクルを意識したもののブラッシュアップする必要がある。		総合的な学習の時間の内容として、生徒が探究的な課題を設定し、学んだことを学習公開日等にプレゼンする等、発信する方法を工夫する。
		キャリアパスポートを生かした目標設定と振り返りの充実	育てたい力の設定振り返りの充実	キャリアパスポートの取組で自分の目標設定や振り返りがしやすくなった割合	80	84	87	46	B	保護者にもコメントを求めると、キャリアパスポートの見え方を工夫した。生徒は事前事後で見通しと振り返りを行う習慣化ができつつある。保護者にはさらにこの取組を理解し協力してもらうよう啓発が必要。		キャリアパスポートの項目や文言を見直すことで、目指す姿を具体的にイメージして目標設定できるように工夫する。(何を目指し、何ができたか目標達成なのか分かるようにする。)学期末の振り返りだけでなく、目標設定時点でも、保護者に見てもらう。(サインあるいはコメントをもらう等。)
10	「地域と共にあゆむ」学校づくり	まちづくりセンターと連携した活動の場の設定	地域の活動(行事)に参加していると思う生徒の割合	地域の活動(行事)に参加していると思う生徒の割合	50	80	31	29	B	いわみっ子まつりには生活科学部と美術部が主体的に企画の立案・運営に携わった。放課後あそび隊(年6回実施)には1年生を中心に延べ100名弱の生徒がボランティアとして参加した。	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生で地域課題について自分事として考えるのはなかなか難しい。学校や学級集団内での課題解決から取り組んでいくとよいのではないかと。探究的なプレゼンができるようになってよい。 	チラシの配付などを通して活動について紹介しているが、参加するにはつながっていない。より主体的な取組を促すためには、役割をもたせるなどの仕掛けが必要である。
		地域と協働した地域での活動の場づくり	生徒主体とした地域課題の把握と解決に向けた取組の推進	地域や社会をよりよくしようとする生徒の割合	50	84	55	35	B	職場体験学習や職業講話等で地域課題にも触れてもらったが、自分事として捉えるまでには至らなかった。しかし、本校生徒が子ども議会で提案したことが実現に向かって動き出したニュースもあり、関心は高まりつつある。		自分事として捉えるための仕掛けとして役割をもたせることや生徒が考えたことをきちんと評価し価値づけることが必要である。
		学校だよりやホームページ、連絡アプリを生かした情報発信	学校便りや学年便りの定期的な発行HPや連絡アプリでの情報発信学校行事等でのオンライン配信の実施	学校の活動内容や様子が分かったり、適切な時期に情報が得られたと考える割合	90	100	75	66	B	HPやすぐるで保護者や地域に発信したり、体育祭のオンライン配信を行ったりした。また、学校だよりは地域に回覧するなどして情報発信に努めた。		関心をもつような紙面づくりや内容を工夫する。
12	小中連携教育の推進	一中校区小中連携教育の取組を推進する。(心の教育部会、生活習慣部会、交流部会)	一中校区の小中学校が連携して活動できたと考える割合	70	80	51	53	B	一中、石見小、三階小の3校で取組を共有しながら実態に応じた活動を行った。交流活動では、松原小も交えた活動も行った。中学生が先輩としての自覚をもつよい機会となった。	すべての学年が小中連携教育に取り組んでいることを実感する場面は少なかった。小中学校のお互いの姿が見える取組を考えたい。		

職員、生徒、保護者の各数値は、肯定的評価の割合。黄色は目標値の80%を下回ったものであり、桃色は60%を下回ったもの。